

日本人を魅了してきたドイツの書物

長尾星蘭

ドイツの本、ドイツ語の本といえばどのようなのが思い浮かびますか。グリム兄弟による『グリム童話』やニーチェの『ツァラトゥストラはかく語りき』は有名ですね。2011年に日独交流150周年記念にあわせておこなわれた展示会では、このような有名な本を含めた稀観書が数多く展示されました。豪華な装飾が施された文字で書かれた手書きの本、技術が進み活版印刷された本、宗教書から科学、文学、ケンペルの『日本誌』などの日本研究書まで多岐にわたっています。

これらのいくつかは日本語に翻訳され、手に取り読むことができます。ゲーテやシラーといった作家の文学作品は今もなお日本国内で人気が高く、図書館や本屋に行けばすぐに手に取って読めるでしょう。もちろん大学の図書館も所蔵しています。

日本に入ってきた多数のドイツの書物があることは分かりました。これら以外にも日独交流の歴史の中であまたの作品が日本にやってきて翻訳されています。では逆にドイツに渡った日本の書物はどのようなものがあるのでしょうか。

答えの一部はこの展示会の特別展示にあります。『日本昔噺』シリーズのちりめん本です。本の紙にしわをつけて織物のちりめんのようになっていることからこの名前がついています。明治初期、桃太郎や花咲翁さんといった今でも有名な作品を



含めた日本の昔話が、英語をはじめフランス語、ポルトガル語、スペイン語、ドイツ語などに翻訳され、浮世絵の技法で描かれた絵とともに日本にやってきた外国人のお土産として各国に渡りました。その結果、これらは日本の民話、伝承、文化の伝達に大きく関わっています。

これらのちりめん本は本学の今年のカレンダーにも使用されています。図書館入口で展示・配布されているのでぜひご覧ください。

ながお せいらん（ドイツ語学科4年次生）